

〈梅替古墳の調査〉

平成 25 年度に国道 21 号坂祝バイパスの建設工事に伴い、梅替古墳の発掘調査を実施する機会を得ました。梅替古墳は、加茂郡坂祝町深萱^{ふかがや}に所在し、郷部山西斜面尾根上の小高い場所^{えんぶん}に立地しています。平面形が直径約 20 m の円形を呈する円墳^{えんぶん}であり、斜面中ほどに段がある二段築成^{にだんちくせい}と呼ばれる形態で造られています。被葬者を埋葬する石室は、西側斜面に開口部のある横穴式でした。斜面の表面は、石室と同じ砂岩の角礫で覆われていました。今回のコラムでは、この石に注目したいと思います。

〈「葺石」と「外護列石」〉

古墳の外周や斜面にみられる石列は、「葺石」や「外護列石」と呼ばれています。葺石は、古墳の表面を飾り、斜面の土砂流出を防ぐため、斜面を覆うように葺かれる石列です。外護列石は、墳丘裾にめぐらされた石列で、美濃地方の類例を

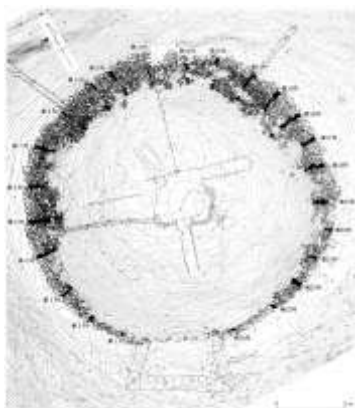


図1 砂行1号墳の葺石

成した横幕氏は、「横穴式石室導入以後の古墳において、墳丘裾あるいは段裾をめぐる石列で、主体部の構築及びそれに伴う墳丘盛土工程と、密接かつ連続的に関わる構造をとるもの」と定義しています。

文化財保護センターの調査では、前者が砂行1号墳、後者が元三ヶ根古墳群に代表されます。

砂行1号墳の調査は、関テクノハイランド建設に伴い、平成8～10年度にかけて行いました。梅替古墳より古い古墳時代中期の古墳です。この古墳の葺石は、チャートの角礫が用いられており、墳丘の斜面を縦並びの石列で区画し、その間に石材を充填する工法で葺かれています(図1)。

元三ヶ根古墳群の調査は、国道248号多治見北バイパスの建設に伴い、平成4年度に行いま



図2 元三ヶ根3号墳の外護列石

した。梅替古墳と同じ古墳時代後期の古墳です。チャートの角礫による外護列石が確認されました。特に3号墳で「内回りの石組」と報告されている石列は、墳丘の盛土内部から見つかっており、石室を構築するための盛土を押さえる施設と推定されています(図2)。

〈梅替古墳の「葺石」〉

では、梅替古墳の場合はどうでしょうか。梅替古墳は墳丘裾、段裾にやや大型の石を置き、その上に石を葺き上げています。その傾斜角度は50～70°に及び、比較的緩やかな傾斜面が多い古墳時代前中期の葺石とは様相が異なります。



写真1 梅替古墳の葺石断面

しかし、墳丘の断面の観察(写真1)では、すでにある程度できあがった斜面に裏込めの土を入れながら葺き上げており、墳丘盛土を押さえるための列石という意図は感じられません。また、2段目葺石の下端部を構築過程で埋め殺す特徴があり、類例としては稲荷塚1号墳・3号墳(可児市)があげられます。

外護列石は、朝鮮半島からの影響を受けて導入され、美濃地方における外護列石の初見は6世紀初頭とされています。6世紀後半に築造されたと考えられる梅替古墳の例は、その構築方法から「葺石」的な様相が強いと考えられますが、急な傾斜角や埋め殺しする事など「外護列石」に共通する要素も見られます。

こうした意味で、梅替古墳の葺石は、外的な影響を受けながら伝統的な葺石の技法を踏襲して設置された、在地的な様相と考えることができます。可児市に類例があることから、当地域の特徴かもしれません。今後の資料の増加が待たれます。

〈参考文献〉

- 横幕大祐 1997 「いわゆる外護列石について」『美濃の考古学 第2号』美濃の考古学刊行会
- (財)岐阜県文化財保護センター2000 『砂行遺跡』
- (財)岐阜県文化財保護センター1993 『元三ヶ根古墳群 白土原9・10号古窯跡』
- 土生田純之 2003 「I 横穴式古墳構築過程の復元」『古墳構築の復元的研究』雄山閣
- 可児市教育委員会 1994 『川合遺跡群』



写真2 梅替古墳全景（西から）



写真3 梅替古墳の葺石（南東から）